

授業方法について、独自に工夫している点と、アンケート結果を受けての改善点【創造科学系】

授業では実験等により示された、より客観的なデータを用いている。
アンケートでは特に指摘を受けていないが、取り扱うデータをより最新のものにアップデートしたいと考えている。

M1AおよびM2Cについて

(1)工夫している点

現在、「情報デザイン」という視点で授業を考えております。
講義での解説や資料が「伝わりやすい情報」「印象に残りやすい情報」になるための情報としてデザインするというものです。

また、講義が言語的な解説だけにならないよう、実践場面のVTRとともに提示しています。

(2)アンケート結果を受けて

概ね肯定的な内容だったので今後はさらにバージョンアップする。
否定的な内容は学内規定に則った条件だったので改善はできませんが、上記バージョンアップで補うことを考えます。

コロナ禍での授業でしたので、学生からはメールでの質問、問い合わせが非常に多かったため、できるだけ丁寧な対応を心掛けました。

昨年、世界的なコロナウィルス感染拡大により、学外実地授業である「S科目」を開講することができず、今年度は昨年度分と合わせて、宿泊を伴わないで実施できるよう、洲原池周辺を制作のための取材場所を選んだ。また、密を避けるために、2学年と3学年の学生をそれぞれ3日間の対面型集中講義と、オンラインでの事前学習・事後学習で授業を組み立てた。

対面の集中講義期間は、真夏であったため、取材時や午前の早いうちは洲原池周辺に出かけ、なるべく日陰で制作するよう、熱射病予防に対する注意喚起を行った。朝の集合時には、健康観察を行ったほか、水分補給に心がけさせ、当日の中心的な課題を明示して、目標を持って制作できるよう配慮した。

2年・3年それぞれ3日目(最終日)には、3~4人のグループどうしで、学生相互による作品鑑賞と意見交換を行い、主体的・対話的で深い学びができるように工夫した。

オンデマンド型の事前、及び事後学習では、用意するものや、するべき事柄をわかりやすく示すようにした。また、《質問や意見はメールで受け付ける》ようにした。

アンケートの「1 授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した」に対する学生の回答は、「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせて60%、「どちらともいえない」が40%であったことから、次年度は学生自身が考える機会を増やすために《教え過ぎない》ようにしたい。
アンケートの「2 授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した」については「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせて50%で、「どちらともいえない」と答えた学生が50%もいたことから、調べ学習の内容を次年度以降は盛り込むようにしていきたい。

昨年、世界的なコロナウィルス感染拡大により、急きょオンラインでの授業開講が始まり、受講した学生たちの多くからは「なるべく対面の形式が良い」との声が聞かれた。一方でオンデマンド型の遠隔授業では「自分の好きな時間に課題に取り組むことができるのでありがたい」との意見もあった。

こうした声を踏まえつつ、コロナウィルス感染状況を見ながら、可能な限り対面授業とし、オンラインでの受講も可として授業を行った。対面で授業に参加した学生には、《助言を与えると同時に、つとめて励ます》ように心掛けた。

オンラインで受講する学生には、《メールで個々の課題の進捗状況を報告》させ、それに対する《助言を、LINEを活用して、画像付きでコメントを返す》ようにした。

アンケートの「1 授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した」に対する学生の回答は、「ややそう思う」が100%を占めたことから、一層、《自ら問題点と解決策を探り出す力を伸ばすよう》にしようと考えている。

アンケートの「2 授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した」についても「ややそう思う」が100%であったことから、さらに《調べ学習の内容を次年度以降に盛り込むよう》にしていきたい。

昨年度は、世界的なコロナウィルス感染拡大により、急きょオンラインでの授業開講が始まり、受講した学生たちの多くから「実技を伴う演習科目はなるべく対面が良い」「友人の作品も見てみたい」等の声が聞かれた。一方でオンデマンド型の遠隔授業では「自分の好きな時間に課題に取り組むことができるので良い」との意見もあった。こうした声を踏まえつつ、対面授業とオンライン授業のバランスを考慮して授業を行った。対面授業では、「毎週会うことのできない受講学生を誉めて励ます」ようにすることと、「学生間での意見交換の機会を増やす」ように心掛けた。

オンデマンド型のオンライン授業では、実際に対面授業を受けている感覚で学べるように、「時間配分を示すとともに、わかりやすいコンテンツ作り」を心がけ、「質問や意見はメールで受け付ける」ようにした。

対面・非対面を問わず、毎回授業の終わりには、「ミニツツペーパー※数分で書く授業の感想文」を課した。作品80%、ミニツツペーパー20%で成績評価をすることについては、「学務ネット」や対面授業の都度、学生たちに伝えてあった。

アンケートの「1 授業で指示された課題・参考文献・資料などを自ら参照した上で、自分で問題点を深く考えた。さらに、その考えに基づき行動した」に対する学生の回答は、「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせると76%であり、「どちらともいえない」と答えた学生が23%いたことから、次年度以降は《教え過ぎない》ようにしようと考えている。

アンケートの「2 授業を受けた上で、自ら関連項目について文献やインターネットなどで調査し、新たな思考を展開した。さらに、その思考に基づき行動した」については「強くそう思う」「ややそう思う」を合わせて62%であり、「どちらともいえない」と答えた学生が合わせて38%いたことから、「調べ学習の内容を盛り込むよう」にしていきたい。

S科目(1)

上記の授業では基本的な事項や情報などを記載したプリントを作成して配布するとともに、美術作品に関する内容が主体であるので作品の画像に説明を加えたスライドを作成し、音声データと共に「まなびネット」にアップした。また、オンデマンドの遠隔授業であったため、毎時間講義内容をまとめる小レポートを課し、寄せられた質問に対して毎時間回答した。

今回のアンケートの回答率は29.7%で昨年度並みだが、例年よりやや低かった。回答を寄せたのが授業に意欲的に参加した履修学生が多かったせいも、例年より問1・問2ともにやや評価が高かった。これは、授業内容を何度も見直せたり、授業資料を拡大したりできる遠隔授業の良さが反映されたのかと考える。一方、講義内容をまとめることを課題とした小レポートについて負担が重い等の意見があり、字数の見直しなど改善を図りたい。

S科目(2)

上記の授業では日本美術について、展覧会での展示作品を見て自分で調べて発表するとともに中学生の美術館見学を想定して鑑賞の授業で使えるワークシート作りを目指した。

アンケートに回答したのは5名の受講生の内1名だけだったが、授業内容に満足し中学校教員になったときに現場の授業で今回の成果を生かしたいとのことであった。

遠隔授業においても、学生が主体的に取り組めるテーマを取り入れた。

また、課題の具体的な内容を早目に提示し、自宅学習できる時間を多めに取れるようにした。

対面授業が再開されたことから、学生とのコミュニケーションや、授業中の質疑応答などを取り入れることができた。ただ、コロナの感染拡大に伴い、一部、課題学習としたことが、レポートの負担を招いていたことが、自由記述からうかがえる。

FS科目においては、自分で問題点を深く考えた学生が、アンケート結果から「強くそう思う」「ややそう思う」が合わせて76%であったことから、一定の成果が出たと考えている。しかしながら、新たな思考を展開した学生は「強くそう思う」と「ややそう思う」を合わせて64%であり、「どちらともいえない」が24%あったことから、自ら調査し、新たな思考を展開するような授業を心がけることと、文献やインターネットなどを利用した調査課題を科すことの必要性を感じた。4年後に担当するときの課題としたい。

S科目については、自分で問題点を深く考えた学生が「強くそう思う」について一人もいなかったことが問題であると認識した。「ややそう思う」は60%であったが、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」が合わせて40%であったことから、それが言える。今後は、自分で深く考える内容を盛り込んだ授業を行うとともに、課題も出して思考力の育成に努めたい。また、新たな思考を展開したと回答した学生が「ややそう思う」で60%あったことから、多少は刺激のある授業をできたと思っている。しかしながら「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」と回答した学生が合わせて40%いたことも反省材料である。これについても文献やインターネットを利用した課題を科すなどして改善を試みたい。

実物や具体物など、感覚や実感、感性などを手掛かりとして探究する意識を育む工夫をしている。

上記の工夫の意図について、少数とはいえ学生に理解されていないことがアンケート結果から分かったため、学生の指導においては目的や意図などの説明をていねいに行っていきたい。

S科目(1)は、3年時後期S科目(2)の専攻を決める重要な授業である。
金工は火を用いるため安全を考慮し、30名程の多くの学生を一度に教えることができないため、金属造形を教える初めての授業となる。
授業は、金属造形の彫金と鋳金の基礎的な技法について学ぶことを目的とする。彫金では各自がデザインした文様を糸鋸で切り取り表面加工を施し、ピンをロウ付けし、着色等を施しピンバッジを完成させる。
鋳金では円心による石膏鋳造技法で、キーホルダーを制作した。蜜蝋と松脂で作った細工蠟を成形し、原型を制作する。湯道を付け耐熱石膏で埋没し焼成した後、遠心鋳造で真鍮を鋳込む。鋳造された作品をヤスリ等で仕上げ、バレルで磨き完成させる。
完成した作品をみんなで鑑賞しながら作品の意図や魅力について解説を行う。15時間という短い時間で、彫金と鋳金の両方の魅力について伝えることが目標である。
アンケートの回答が少ないので答えが難しいが、S科目(2)を選択した学生を考慮すると問題ないと思う

S2科目

新型コロナの影響もあり、受講生を半分ずつに分けて授業を行った。自宅では描写についての課題(鉛筆描写・彩色描写・貼り絵)を行い、大学ではポスターカラーを用いて明度を意識した色面構成や、模写を行った。
学生が美術が嫌いな理由は「絵を描くことが苦手」という意見が多かったため、描写と構成について学ばせている。成績は6つの課題と出席を100点満点で換算し平均で評価としている。良い作品は制作の参考になるように教室の後方に張り出している。

はじめての遠隔授業を実施して、対面授業で違う点を考慮して、学生たちがいかに授業内容を理解してくれるかについての方法を考えた。音声を入れる方法にトライしてみたが、私自身の技術の習得ができず、なかなかうまくいかなかった。音声の言葉を入力することで、学生たちに教科書まではいかないが資料を作成し、毎回課題に取り組んでもらった。
課題の取り組みには個人の差はあるものの、ほとんどの学生が真剣に取り組んでくれたと思う。
対面授業での課題は、グループでのディスカッションをもうけ、それぞれの考えや意見により、その授業の内容がより深く学べることもあると思われるので、その部分を遠隔授業でどのように補えばよいのかが今後の授業の課題となっている。
また、今後対面授業を実施した場合、遠隔授業で取り組んだことも活かし、学生たちがより理解しやすい授業の方法を考えていきたい。

①授業方法について独自に工夫している点

- ・課題を課す理由を説明した
- ・早口という指摘があったので、丁寧にゆっくり話した
- ・合奏1については時間内に片づけまで終わるようにした
- ・個人レッスンになる管弦打1については、全員に丁寧に指導するように時間外まで授業を行った。それにより設定されている授業(90分)の約1.5倍の時間を要した。
- ・メールでの質問対応と指導を行った

②アンケート結果を受けた改善点

- ・S科目については、曲の難易度、曲の長さの違い、学生の予習と練習具合により、個々のレッスン時間に違いが生じてしまう。これをできるだけ均等に近づける工夫を考えてみたい。
- ・これまでの経験から、この授業アンケートで学生から良い評価を得るためには、課題の数と難易度を下げるしかない。しかし学生の自己評価に反して、私自身は未消化に感じている。

M2科目

グループ課題として単元計画に取り組み、発表・検討・改善を行った。グループで時間をかけて取り組んだグループもあったが、遅刻・欠席が目立ち、個人の取り組みの差も少なくなかった。課題である。

S科目(1)の1/3(45分×15回)

遠隔授業での学習が難しい科目であるが、大半の学生が提出期限を守ることができた。

S科目(2)

大半の学生が提出期限を守ることができた。金属材料に関する知識について、中学生に対する説明と、技術科教員用の説明を並行して実施しているが、結びつきについて引き続き改善をはかりたい。

S科目(3)

大半の学生が初めての板金加工や旋盤実習であったが、しっかり取り組み、レベルの高い製作ができた。

FS科目

技術科の授業づくりの具体例と研究を対面45分程度と遠隔45分程度で紹介した。レポート未提出者がいた。とても残念であった。

実技科目においては、主にグループ学習で授業展開している。学習課題はこれまでよりも大幅に精選し、一つの課題を掘り下げることにした。これにより、探究的な取り組みが、やや改善されたようだ。講義科目については、意見交換の場を十分につくることができていないことが課題である。とくに、ICT活用に課題が残る。

遠隔授業の際には、1回分の授業内容になるような動画及び課題を提示するように努めている。

対面の場合には、なるべく3密を避けつつ、学生同士の学びが深まるような学習形態になるよう、コーディネートをしながらか講義・実習を進めている。

今回、アンケート結果を踏まえて、与えた課題の量に負担を感じる学生がいたことを反省した。次年度は、今回の反省を踏まえて、さらに課題の量と質を吟味していきたい。

授業の内容について、学生さんが今後の教員生活に必要な能力を身につけられるように、授業コンテンツや学習方法について厳選するようにしています。評価はまずまずのようです。今後も指導方法をブラッシュアップしようと思います。

・授業科目が広範な知識を得ることを目的としている。独自の工夫として、その授業内容を非常に重要な項目に厳選することとした。さらにレポート課題として、授業内容から自分で本やインターネットで調べてまとめることを課した。

・アンケート結果をみると、その意義は伝わっているように思う。しかしながら一部は難しすぎたり、簡単になりすぎたりする部分があったものとする。学生にとって適正な水準を維持するように修正したいと考える。

特に専攻外の学生が受けるS科目について、いかに興味を持たせるかを工夫して行なっているが、アンケート結果を見る限り、なかなかその興味を引き出せていないかもしれないと感じた。美術図画工作分野は得手不得手があり、苦手意識を持っている場合、そもそも関心を遠ざける傾向が見られるため、そこをいかに遠ざけないようにするか、今後も探っていきたい。

・オンデマンドでは自宅で各自の学びを深め、対面授業の際にそれらを他の学生と共有できるようなカリキュラムにしている。

・オンデマンドでの学びの際に、主体的な姿勢を持って課題に取り組めるような工夫をする。

講義はオンデマンド形式で動画で授業を配信した。なるべく対面の授業に近い形で、実際に授業者が画面に登場しながら解説するような形の動画を配信した。パワーポイントを使った解説だけではなく、実際の授業映像も入れながら理解が深まるように工夫した。
改善点として、こちらのミスで課題の提出ができなくなった回があったため、今後このようなことがないように注意する所存である。

コロナ禍の中での声楽や合唱の授業なので、できるだけ感染に配慮しつつ授業の中身を損なわないように工夫しました。
しかし、もっと実践の時間が欲しかったのではないかなと思われまます。
実技の授業なのですが、講義的な事も取り入れないといけないのかなと考えます。

本年度は、昨年度の反省を踏まえて、感染症予防等によるオンデマンド型の場合は、情報量が過度に多くならないようにするとともに、対面が可能な場合との関連を深めるようにしました。その結果、「運動レシピを自宅で各自考えることで、対面と遠隔をうまく利用して共有までできたのが良かった。」という意見もいただいた。また、学生の皆さん自身が、教師として、この「コロナ禍」そのものを教材として取り上げたいと考え、「コロナ禍における体育授業」についても、意見交流の場を設けました。自由記述には「いつも新しい内容を学べた」という意見をいただいた。今後も、学生の皆さんの「今」をとらえた授業方法になるよう改善を図っていきたい。

大学での実技形式の学びは、技能の習得より、理論を学ぶことが重要なので、理論と実践のバランスを考慮して授業を行っている。つまり、できることより、できるようになるための理論を学ぶことに重点を置いている。学生特に1年生には教員養成としての学びを少しずつ理解していただきたい。この点を伝えることができない部分が課題であり改善点であると考え

・遠隔授業では、学生個々のウェブ環境を考慮し、重すぎないデータ容量として、音声付きのパワーポイントによる授業を展開している。また、自宅以外のWi-Fi環境で一括ダウンロードできるよう、授業はじめにすべてのデータを公開するなどの配慮もした。アンケートでは、データ容量が大きくても動画を望む声や、反対に、データ容量を減らして欲しい意見などがあるため、今後も学生の声を聞き対応を考えたい。
・対面授業では、感染リスクのある内容を、リスクのない内容に変更し実施した。アンケートでは、対面の授業の方が説明が分かりやすいといった意見が多かったため、今後も継続したい。

アクティブラーニングの視点から、自分の意見を持ち、かつ、人の意見が共有できるようなICTツールを用いている。1件のみだが、動画の長さが指摘されたので、気をつけたい。

しっかりとシラバスに説明し、それに沿って授業を実施するように心がけた。特に、遠隔授業で実施したので、教科書を指定したS科目(1)のような授業は、学生が何度も教科書を読むことを誘導する工夫を資料にて行なった。履修者が遠隔授業に習熟したこともあり、学習に積極的な取り組みが出来た。S科目(2)は、最初の段階で4~5回対面授業が実施できたので、その後の遠隔授業も問題なく円滑に実施できた。S科目(2)は、最初の段階での対面授業は数回必要であることを確信した。S科目(3)のような解説的な授業に関しては、遠隔授業であってもスライドショーで実施できるので、音声入りで学生が何度も聞くことができるように工夫した。その点は履修者が好きな時に何度も繰り返しできるという評判であった。反面、スライドショーの機械音に対する違和感があるという声もあったが、現時点でのコストパフォーマンスを考えるとこの方式でもしかたないと考える。全てに対して、毎回の提出した課題(小テスト)の自分の結果に自信がなく不安を感じているようである。少なくとも間違っていることに対する指摘だけでも実施しようとする。

昨年度のすべて遠隔から、対面と遠隔の隔週になった授業が多かったことから、対面での授業の重要さに気付くとともに、やはり遠隔で行う際のフォローの難しさを痛感した半期であった。音楽はやってみる、音を聴くこと、息を合わせるなどが重要であるため、経験したことを遠隔で生かす、経験を思い起こしながら、知識と結び付けていくという流れが大切と考え、なるべく遠隔と対面の双方が生きるといような流れを工夫した。また、自分でより深く調べるなどの自己学習に結び付けていく工夫がより必要であると感じた。

S(1)科目の実技指導ということで、個々に問題点が違うため、しかし、ひとりひとりにかかる時間も限られているために、最低限の勉強を必ず学生にしていく様に伝え、授業では、学生が自分で勉強しきれない部分を指導する様にしている。3年、4年生になると私の指導の方向性を理解して自分で勉強して授業に臨む学生が多いが、1年生はまだ、自分でどう勉強して良いかがわからないため、今後は、その勉強方法を教える事にも時間をかけたいと思う。

S(2)科目に関しては、コロナの為、感染予防に最大限気をつけたために、例年通りの授業運営はできなかった。しかし、その中でも要所は的確に指導できたのではないかとアンケート結果からも推測する。

座学より、より実践的な学修を行いたいと考え、模擬授業の時間をなるべく多く設定している。前半に家庭科の学習指導要領のポイント、手縫いの基礎を中心とした学習内容体験、教員による新規学習内容(契約)の模擬授業、指導案作成指導を行い、後半は学生による模擬授業の時間に充てている。そのため、前半の学修内容が多くなり、手縫いの苦手な学生には時間が足りず、空き時間に製作する時間を設ける等の配慮を行った。

学習指導案を作成し、実際に模擬授業を行うことは、おおむね良い評価を得られた。模擬授業の時間を確保するために前半の学修内容を詰め込みすぎたので、次年度からはもう少しその内容を精選したいと考えている。

前向きに取り組миいただいた方が多かったですことがわかりました。受講生に感謝しています。

受講生の方にルールを考えてもらいました。結果から、ルールの意味を意識して、楽しむための工夫につなげる活動にもなった様子を感じることができました。

これまでの活動で体験のない種目に触れる機会になったことがわかり、取り入れてみてよかったと思いました。

授業方法について独自に工夫している点
学生がメールやLINEで質問しやすくしている